

家守

不動産の管理・運営を行う傍ら、入居者の誘致や入居後のサポート、さらにはまちの運営にも携わる人もしくは組織を「家守」と呼ぶ。

もともと家守は江戸時代に不在地主に代わり長屋の管理・運営を行っていた職業だった。江戸の長屋は不在地主が多く、家守は彼らに代わり地代や家賃を徴収したり、時には借家人の面倒をみたりしていた。さらには公用や町用も担っていた。江戸のまちには二万人を超える家守がいたという記録も残っている。家守は明治に入っても存在していたが、時代とともに不動産やまちのありようが変わると、徐々に姿を消していった。それ以降、家守が担っていた役割は専門分化され、それらは不動産屋や共同住宅の管理人などの個別の職業として存在してきた。

現代において家守が復活したのは、今世紀に入り不動産のマネジメントにおいて入居者のサポートやまちづくりとの連携など、従来の枠組みでは対応が難しい要素が必要となってきたためである。現代では重点を置く領域により性格の異なる家守が存在する。リノベーションを活用したまちづくりに取り組む家守もいれば、インキュベーション（起業・ビジネス支援施設）やシェアオフィス、シェアハウスなどを運営する家守もいる。さらには大規模複合施設の運営やエリマネジメントを担う家守も存在する。しかしいずれの場合も、不動産、人、まちという領域にまたがりマネジメントを行うという点は共通している。

家守にはこれらの領域の知識が求められる一方、マネジメントやマーケティングといった能力も必要となる。また、不動産オーナーや入居者、地域住民など立場の異なる多様な人々とのつきあいが生じるため、コミュニケーション能力も不可欠である。家守になるためには、前出のような家守を実践する職場に入り経験を積むか、あるいは不動産業やまちづくりの現場において経験を積み、その上でさらに必要な領域の知識を学ぶといった方法などがある。

家守が活躍できる場は都市部に限らない。空き屋や休耕地などが存在する過疎地域から都心繁華街、さらには大規模な複合施設に至るまで、家守が能力を発揮できる場は多様である。また、不動産企業や行政、商店街といった組織の中においても活躍の機会は存在する。家守は現状まだまだ認知度が低く職業として確立しているとは言いが、今後は不動産やまちづくりの領域を中心にその職能はますます必要とされるようになっていくだろう。